

# かながわ 企業探訪

vol.202

## 一般社団法人AOH

(TDB企業コード: 028008165)

法人本部 横浜市西区みなとみらい5-3-1  
はたらく支援工房ショコラボ

横浜市都筑区茅ヶ崎中央30-17

代表者 伊藤 紀幸氏

電話番号 045-507-8688

設立 2012年(平成24年)9月

目的 菓子製造など

U R L <http://chocolabo.or.jp/>



当社を引っ張る伊藤夫妻

### 「決意」を持ってソーシャルビジネス

「海より広いモノは空であり、空より広いモノは人の心である」伊藤会長の訓示を、従業員も元気に復唱する。そして、「皆さん認め合って、広い心で楽しく仕事をしてください」と会長の締め言葉の後、「ショコラボ！オー！」という掛け声で、従業員が一斉に持ち場に広がる。

これは、一般社団法人AOHが運営する、はたらく支援工房「ショコラボ」の朝の風景だ。

はたらく支援工房「ショコラボ」が、2012年11月に横浜市から福祉事業所としての認可を受け、本格稼働してから約1年半。障がい者1名からスタートし、今は障がい者20名。健常者が10名弱の体制まで拡大し、その活動内容や設立のきっかけ、意義などは、様々なテレビ、ラジオ、新聞・雑誌などで取り上げられていることから、ご存知の方も多いかもしれない。

——設立から1年弱で、大手百貨店との引き合い  
現在、「ショコラボ」のチョコレートは、近鉄百貨店、さくら野百貨店、丸井、阪急阪神百貨店、J R東日本、港の見える丘公園内にあるポートビルホテル、レンブラントホテル、山手西洋館、東京ドーム 宇宙ミュージアムTeNQ、

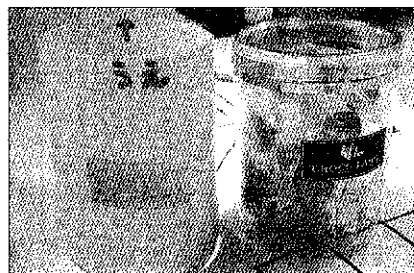
東京高輪輪のレストラン・フェリーチェなど、錚々たる先との取引を獲得している。

立ち上げから今日までの活動について、伊藤会長は「おかげさまの一言に尽きる」と振り返る。さらに「まだ、試行錯誤の日々ですが、皆様からのフォローの風を「ショコラボ」を通じて感じる事が出来て、なにか風に乗った大風のような状態です」と語る。

なかでも、大手百貨店が、設立から1年弱の組織と直接取引をするということは極めて異例のことだ。そこには伊藤氏の幅広い人脈というきっかけがあるものの、大きな組織になればほどトップダウンで取引が決まることは難しい。百貨店で取り扱ってもらえるということは、「ショコラボ」のチョコレートがその基準をクリアするだけの味と品質を持っていることの証だ。

——チョコレートの味と品質へのこだわり  
その味と品質は、伊藤氏が持つこだわりの賜物と言っても過言ではない。

「食べ物を買う時に、『作り手の背景を全面に出して売る』というのは原理原則からするとちょっと外れている気がします。『本当に美味し



ちょっとした工夫で、ラベル貼りの効率化が図れる



朝礼の風景

いから買いたい」という商品を提供して、この美味しいスイーツはどんな人達で作っているのだろうか？とさらに踏み込んで聞かれた時に始めて、『障がいを持つ人と持たない人が協力して作ったものです』と、答えるぐらいが良いと思います。つまり、お涙頂戴で商売するのではなく、美味しいから買って頂くということを大切にしたいと思っています」とこだわりについて語る。

さらに、「私が、ボランティアではなくソーシャルビジネスと取って代わっているのは、お客様からの『ありがとう』の結果として、適正利潤を脈々と確保し続ける企業体になりたいと思っているからです」と付け加える。

#### ——障がい者の親達が安心出来る組織を

「ショコラボ」は、ご子息に障がいを持つ伊藤氏が、障がい者を広く雇用できる会社を作るために、奥様で理事の伊藤祥子氏と一念発起して作った企業である。その背景には、日本における障がい者の就職に対しての厳しい実態がある。

伊藤氏によると、厚生労働省が調べた障がい者の平均月給が約1万3千円。しかし、実態はバラバラで月給3千円という企業もあるという。「そのような環境では、障がい者の親は子供を残して安心して死ぬことが出来ません。障がい者の親がこの世を去っても、我が子を守ってくれるという組織を作り上げたい。それが、私のミッションです。そのためには、『ショコラボ』を適正利潤を確保しつつゴーイングコンサーン企業として育てていかなければなりません」。

さらに理事の祥子氏は「我々だけでは、支えられる人数が限られているので、今後は障がい者を受け入れる側の企業の拡大・支援も併行して行っていきたい」と語る。

#### ——「ショコラボ」は工夫の産物

障がい者雇用のキーワードは、仕事の切り出

しだそうだ。障がい者は、適材適所に配置されれば、大いに能力を発揮する。「ショコラボ」では、チョコのテンパリングのプロ、シール貼りや箱折りのプロなど人員を適材適所に配置することを心掛けることで、各々の社員の能力を最大限に引き上げている。

そこには、スタッフのちょっとした機転や知恵も必要となる。「例えばシール貼り作業にしても、貼る目安のような道具(治具)を作るなど、少しだけ工夫をするだけで効率が上がります。そのような知恵を、日々スタッフが振り絞っています」と、現場を司っている理事の祥子氏は言う。

実際に工場で働いている社員が見せる、黙々と作業に取り組む姿勢や、一人一人の眼差しはプロフェッショナルそのもので、社会に参加して働く喜びを感じながら作業をしていることがひしひしと伝わってくる。

「現在は、障がい者を採用しても、何をさせればよいのかを分からない企業が多い。しかし、ショコラボの活動などを通じて、障がい者が様々なことが出来るという可能性を知ってもらい、自ずから障がい者を採用する企業が自然に広がってほしいと思っています」

#### ——浸透する伊藤氏の「決意」

伊藤氏が当社を作るきっかけとなった、『障がい者の親がこの世を去っても、我が子を守ってくれるという組織を作り上げる』という揺るぎない「決意」は、「ショコラボ」への協力者や引き合いをかける業者を突き動かすきっかけとなっている。

なかでも、その決意に賛同した数多の有名パティシエが日々工場に足を運び指導をすることは、ショコラボのクオリティを一流ブランドに引けをとらないレベルに高め、商品力を上げている。ショコラボの飛躍は、まだまだ止まることをしらないようだ。